

シシヤモ稚魚の飼育について

増殖部 尾身 東 美

一、はじめに

シシヤモがサケなどと同じ様に普段は海で生活し、成長成熟すると川に入り、そこで産卵すること、産卵された卵は砂などに付着し川で生活し、ふ出後、海に帰ることは皆様もよく知つていると思います。釧路を始め道東各地ではかなり以前から人工採卵によるシシヤモ資源の保護が行なわれて来ました。これは川に昇つた親魚から人工的に採卵し、卵を独特のふ化器に収容し、翌春自然にふ出して海に帰るのを待つ訳です。ところが近年もつと積極的に増やすこと、例えば餌を与え大きくして放流したり、あるいは親になるまで人工的に飼育ができないものかと云つた要望が水試に持ち込まれるようになりました。当水試でも従来からこの種の試みは行われて来ましたが、片手間にできると云う簡単な問題でなく未解決となつておりました。しかし、

既に沿岸資源の荒廃した本州方面では獲る漁業から作る漁業のスローガンのもとにいろいろな魚類の養殖が試みられ、ある種のものでは成功を収めています。私たちとしても資源の豊富な道東だからと云つて安閑としておれない訳です。それで、まず技術的面だけでも解決して置かなければと、昨年新釧路川で採卵したものを使用し、飼育の予備実験を始めました。詳しくは項を改めて書きますが、現在、最も長く生きていますのでふ出後約90日、大きさは約15mmです。それでは市販の大きさにするのは大変なことだと誰でも考えることでしょう。正にその通り、ふ出時が約8mmです。それから思つた程大きくならないものです。たゞひ弱な状態で海に出さず多少餌づけをして海に放流する目的は達せられるかも知れません。しかし獲れるだけ、いるだけ

獲ると云つた漁業が続くならば道東の資源として本州のそれと同じ方向に進まざるを得ない訳で、いなくなつた時は試験場にたのめば、資源の回復が簡単にできると云つた安易な考えが皆様の中にあるとすればこれは大変な間違いなのです。その様な意味も含めてこの種の研究が皆様自身に資源の重要性を知つてもらふものとなり安定した漁業経営の礎となれば幸いです。

二、稚魚の餌づけ

シシヤモ稚魚に餌を食せせよとする試みは従来種々と計画、実施されましたがなかなか思う様に行かず途中で失敗して来ました。それで私達の計画でもまず第一になんでもよいかから稚魚の消化器に餌を入れること、第二に出来るだけ長く飼うことを目標に実験を始めました。

昨年11月20日 新釧路川で採卵したふ化盆10枚を当水試の水槽中で管理し、ふ出を待つたところ、2月12日 最初のものがふ化しました。ふ化直後の稚魚は全長8mm内外、口の大きさは約0.3mm、体の割に口の小さいのが特長です。それで第一目的を達するには餌が0.3mmより小さい必要があります。種々調べたところ、米国ユタ州産アルテミア（エビの一種）

のふ化直後のものがよいらしいと判り、これを与えてみました。そうしますとふ化後4〜5日目のものの腸の部分にあの赤い特長のアルテミアが透けて見えるではありませんか、偶然入つたのではと気を落ち着けて操り返したところ、やはり入るのです。これで第一の目標は達成できました。次に第二の問題になる訳で、はたしてアルテミアが栄養上価値があるのか？これを確める方法は食べさせ得る餌が一種しかない現在比較のしようがなく、何時まで生き永らえ得るかで知るより仕方ありません。しかし淡水中で飼つたものはある期間(約40日)以上どうしても生かすことができないのです。ところがある期間淡水で飼い海水に移したものは少数ながら95日(6月12日現在)も生き続けましたので第二の問題についても、ある程度の目安がつきました。たゞ大きさをみると95日目では15mm内外で、思つた程大きくなりません。天然の状態が知られていないので何とも云えませんが、餌の与え方その他、種々のことが考えられます。それで今後この問題を明らかにする予定です。

以上この項終

(つづく)